

經濟學範疇論の問題

加藤 由治 郎

一

經濟學範疇論、即ち經濟學に関する範疇の体系の問題は、經濟哲学の一部門である。そこでこの問題について論ずるには、先づ範疇論が、經濟哲学の中で如何なる位置を占めるかを明かにせねばならない。然らば經濟哲学とは如何なるものであるか。それは如何なる課題をもつものであるか。

一般に哲学が、それ自身一個の學問として、自己の立場を自覚し、その課題を見出すに到つたのは、それが自己に對する他の學問、即ち經驗科学との關係を媒介とするによつてである。哲学の特殊部門としての經濟哲学に於ても事情は同様であつて、經濟哲学は經濟學との關係を通ずる事によつてのみ、それ自身の意義と課題とを自覚するのである。之を歴史的に見ても、經濟哲学が哲学の一部門として現はれたのは、經濟學が独立の科学として成立し、發達した後に於てである。⁽¹⁾

經濟哲学は、先づ經濟學について反省し、經濟學的認識の依つて立つ論理的根據を確立せんとする。第二にそれは經濟學の對象である經濟的存在が、歴史的、社会的存在の全体の中で、如何なる意義と構造とをもつかを論究する。

一は経済学に関する認識論の問題であり、他は経済的存在に関する形而上学、或は存在論の問題である。この二つの課題をもつ事によつて、経済哲学は、経済学認識論と経済的存在論との二つの部門に区別される。而して経済学範疇論は、経済学認識論の一部門を構成するのである。(2)

経済学認識論は、経済学の論理的前提を基礎づけ、経済学が「如何にして学として可能であるか」との間に答えんとするものである。経済学が一個の学として存立するには、その概念構成を導き、諸概念の先天的原理となる根本概念、即ち先天的概念が確立されねばならない。然るに経済学の先天的概念、即ち範疇は、経済学自身の認識目的によつて制約せられている。学の認識目的は、その学的認識の一切を基礎づける最高の形式であるが、其はその学の方法に於て表明せられている。(3)そこで経済学認識論は、経済学の方法及び認識目的を確立する方法論と、経済学の先天的概念を論究する範疇論との二つの部門に分れるのである。

経済学方法論は、学一般の方法論を前提し、経済学が学全体の中で、如何なる位置を占めるかを示すと共に、経済学が他の学と區別して存立し得る所以の、個有の方法と認識目的とを明かにするものである。今方法論の問題に立入る余猶はないが、たゞその結論について述べると、経済学は経済的文化價值を認識目的とし、経済生活を対象とする特殊的文化科学である。経済学は文化科学の一つであるが、文化は歴史的、社会的二重構造であるから、経済学は歴史的、社会的科学である。而して経済学は、その認識の論理的構造に基く二元的方法に制約せられて、歴史と理論、即ち経済史と経済理論との二つの部門に分れるのである。

経済的文化價值は、経済学の認識目的であり、経済学の先天的概念、即ち諸範疇を統一して経済学を基礎づける最

高の形式であるが、経済的文化價值が経済学を可能ならしめるのは、特殊的形式である諸範疇を通ずるによつてである。即ち経済的文化價值は、諸範疇に分化する事によつてのみ、経済学的認識を基礎づける事が出来るのである。言いかえると経済学の諸範疇は、謂はば超越的当爲としての経済的文化價值と、經驗的事実としての経済学とを結合する内在的意味であり、この内在的意味を媒介とするにより、経済的文化價值は経済学の認識目的となり、経済学はこの認識目的に基いて可能となるのである。こゝに於て経済学認識論の第二の問題として、経済学範疇論が要求されるのである。(4)

以上の前提の下に、経済学範疇論について述べようと思うが、その前に左右田博士の提唱する「貨幣中心説」について一言しておきたい。博士によれば、経済学の認識目的である経済的文化價值は、経済学にとつて一個の先天的形式であつて、何等の内容的制約を許さないものである。併し経済学の認識目的が、他の学の認識目的と區別して存在し得る爲には、この純粹形式として文化價值が、内容的に制約されねばならない。而して経済的文化價值に内容的制約を與えるものは、それ自身経済学の先天的概念である所の貨幣概念である。貨幣概念は、経済学的認識の唯一の論理的アプリアリであると共に、経済的文化價值に實質的内容を與える外的表徴となるものである。(5)

左右田博士にとつて、貨幣は経済学の先天的概念、即ち範疇である。経済的文化價值は、貨幣を特殊的形式として持つ事によつて、経済学の認識目的となり、経済学の可能性を基礎づける事が出来るのである。然るに経済学の先天的概念は、單に貨幣概念のみではない。経済的文化價值の特殊化としての範疇は、一個の貨幣概念に限られない。而つて経済的文化價值は、貨幣概念によつてのみ規定せられるのではなく、相互に關聯する諸範疇の全体によつて、内

容的に制約せられているのである。経済学の諸範疇は、経済的文化價值に基いて統一的体系をなすが、この体系に於て各範疇は、相互に依存しながら、夫々個有の位置と意味とを保持して、同一基調の上に並立している。従つてこの系列の一員を以つて、全系列の中心となし、経済学的認識の唯一のアプリオリであるとする事は出来ない。かくて貨幣中心説に代つて、範疇の体系の問題が、経済学認識論の第二の問題となるのである。然らば如何なる概念が、経済学の範疇として立てられるか。その範疇の体系は如何なる原理に基いて構成せられるか。之等の問題に關して私の研究した所を述べようと思ふ。⁽⁶⁾

註(1) 自然科学との關係に於て、哲学の二つの課題を確立したのはカントである。私が経済哲学の課題として二つの問題を立てたのは、カントの立場及びその問題提出の態度にならつてである。

Kant, Kritik der reinen Vernunft, 2. aufe Vorrede. 天野貞祐「カント純粹理性批判」参照

(2) 経済哲学に於ける認識論と存在論との問題は、結局一つに統一せられねばならない。併しその統一は、夫々の問題を、最後まで展開する事によつてのみ達せられるであらう。而してその結合の契機は辯論の中に見出されると思ふ。

(3) 方法、即ち Methode なる語は、ギリシヤ語の Methodos に由來するが、この語は Meta(従つて、或は向つて)と Hodos(道)とから成る合成語であつて、一定の目的に従つての、或はそれに向つての道を意味する。故に科学の方法は、科学的認識の過程に一定の方向を與え、それを学の認識目的へ向はしめるものである。

(4) 経済学認識論に於て、之まで主として論じられたのは方法論の問題であつて、範疇論は全然未開拓の領域である。而もカントの認識論に於て、範疇論が中心問題であつたと同様に、経済学認識論にとつて、範疇論は最後のそして最も重要な問題である。

(5) 我國に於て始めて経済哲学の問題を提出したのは左右田博士である。その貨幣論は、経済学にとつても重要な意義をもつ

ているが、それと同時に経済学範疇論への道を示すものである。

左右田喜一郎「経済哲学の諸問題」、「貨幣と価値」

(6) 範疇なる語には、論理的、認識論的意味の外に、形而上学的、存在論的意味がある。カントに於て、範疇は認識の先天的形式であるが、アリストテレスにとつては、範疇は存在の在り方、即ち存在そのもの形式を意味している。而してヘーゲルの範疇論は、この二つの意味を統一したものと云へる。しかし本論では範疇は、カントに従つて認識の先天的形式の意味に於て用ひられている。

二

経済学は、人類の文化生活の一面たる経済生活を研究の対象とする。経済生活は、経済的文化価値に係つて可能となる有意味的生活であるが、経済生活の意味は、それが経済的文化価値を実現しゆく価値生活である所に存する。経済生活は価値生活であり、一切の経済現象は価値現象である。こゝに価値といふのは、価値一般ではなく、経済の価値、即ち経済価値である。価値或は経済価値は、すべての経済現象の本質的契機である。人間の生活は、それが価値生活であるによつて、経済生活となり、一切の現象は、経済価値に係るによつて、経済現象として他の現象より區別せられて、経済学の対象となる。こゝに於て価値或は経済価値が、経済学の基礎概念となる。経済価値は、経済的文化価値に照応すると共に、経済生活の内在的意味を形成する先天的概念である。かゝる先天的概念としての経済価値を前提するによつてのみ、経済学の諸概念は可能となり、経済生活は経済学の対象として概念的に把握されるのである。そこで私は、経済学に関する範疇論を、価値概念の考察から始めようと思う。

經濟價值は經濟學の根本概念であり、從來の經濟學は、すべて價值論から出發している。そしてこの價值概念を如何に解するかによつて、夫々の經濟學の立場が區別されている。ところで價值現象には、價值を認める主体と、價值を認められる客体との二方面が存在するから、價值論は評價主体を根底とする主觀價值説と、評價客体を主とする客觀價值説とに分れる。主觀價值説によれば、價值は使用價值であり、効用という主觀的要素によつて決定される。之に反し客觀價值説にとつては、價值は交換價值であり、客觀的要素である費用によつて決定される。而して價值論に於ける主觀説と客觀説との區別に対応して、從來の經濟學は、經濟現象を客觀的に考察する客觀主義的經濟學と、それを主觀の內面的動機から説明する主觀主義的經濟學とに區別せられるのである。

價值論に於ける主觀説と客觀説との対立は、恰も哲學上認識論に於て、認識の根據を客觀的要素に求める經驗論と、主觀に生具する本有觀念を認める合理論とが対立する事を思はしめる。こゝから價值論は、認識論と共通の困難を負うものであり、従つて價值論は、認識論の問題として考察せられ得る事が予想されるのである。而して認識論に於て、認識主觀或は認識對象の一方に固執して他方を顧みない所に、經驗論及び合理論の根本的欠陥が存すると同様に、價值論に於ける二つの傾向が、主觀的要素と客觀的要素との何れか一方に偏して他方を忘れる所に、その破綻の原因が存するのである。然るに客觀價值説は、客觀に即せずしてはその獨立の立場がないに俟らず、客觀のみに即しては何故に一定の費用が支拂はれるかという根本問題を説明し得ない。他方主觀價值説は、効用に対する主觀の判断を基礎としながら、効用が價值の内容となるには、客觀の有限性を前提せねばならない。そこで價值論は、主觀説及び客觀説の何れに於ても、意識的或は無意識的に、他の要素を前提する事によつて、經濟現象を説明せんとする。而して

この場合何故にと問えば、経済上の価値は事実かくあると答えるのみであつて、之は畢竟、価値論によつて説明すべき現象を最初から前提する循環論に外ならない。

この様に主観価値説及び客観価値説は、何れもその立場を純粹に維持する事が出来ない。ここに於て価値論の第三の立場として、主観的要素及び客観的要素を共に攝取して価値現象を説明せんとする折衷説が立てられる。之は恰も認識論に於て、主観的及び客観的要素のすべてを、經驗的所與として取入れる素朴的實在論の立場に比せられるものである。併しこの場合、価値は需要と供給との關係に於て見られ、価値論はその本來の意義を失つて、價格論とならざるを得ない。かくの如く従來の経済学は、価値論を基礎的理論とするに係らず、何れの価値論も、価値概念の本質を把握する事は出来ない。然るに最近の経済学は、価値論そのものを排斥し、価値論なき経済学を主張する。それによれば、経済学は經驗科学として、その研究の範囲は經濟現象に限られるが、価値論は現象の背後に本質或は実体を求める形而上学に外ならない。経済学が經驗科学である限り、かゝる「蔽はれた独断」としての価値概念は、経済学の領域より追放されねばならない。かくて近代経済学は、価値論をすてて直ちに價格論より出発し、價格現象を中心として、^(I)經濟生活を理解せんとするのである。

価値論に於けるかゝる状況に対して、我々は何を考ふべきであるか。価値論は経済学によつては、解決し得ない問題であろうか。或はそれは経済学にとつて、無用な理論であろうか。併し私は、従來の経済学が価値論を解決し得ず、そして最近の経済学が価値論の存在を否定する所に、却つて哲学の問題として、価値論の認識論的研究の必要なる所以を見出すのである。経済学が一個独立の經驗科学として存立するには、経済学的認識の客観性を基礎づける先天的概

念を予想せねばならない。かかる先天的概念を前提する事なくしては、経済学の概念構成が可能とならない。價值が経済学の基礎概念であるのは、かゝる先天的概念の意味に於てである。この意味に於ける經濟價值は、経済学の論理的前提であり、経済学の諸概念を可能ならしめる先天的要素である。かゝる論理的前提としての價值概念は、経済学自身によつては基礎づける事は出来ない。従來の経済学が價值概念を確立し得なかつたのは、本來哲学の問題である價值論を、經驗科学の立場で論じたからである。近代経済学が價值論を排斥するのは、科学と哲学との限界を自覚したものであると言える。併し哲学の問題としての價值は、經濟現象の背後に横はる形而上学的实体ではなく、経済学の論理的前提、即ち範疇としての價值である。⁽²⁾ 價值は経済学の極限概念である。経済学より追放された價值概念は、経済哲学の中に正当な位置を見出すと共に、それは先天的概念、即ち範疇として、経済学の論理的前提となる。かくて價值論は、経済学認識論の主要な問題となるのである。私は價值論を認識論的に考察して、経済学の先天的概念、即ち範疇としての經濟價值の意義を確立すると同時に、この價值概念に關連して他の諸範疇を展開する事によつて、経済学に關する範疇の体系を立てようと思う。

註(一) カッセル (Gustav Cassel) は價值論を以つて「何等実益のない空理、空論」であるとなし、経済学は價值論を放棄して、直接價格理論の上に立つるべきであると主張した。この價值論より價格論への轉向は、近代経済学の一般的傾向であつて、パント (Vilfredo Pareto) や シンペーター (Joseph Schumpeter) 等も最初から價值を價格に置き代へてゐる。本來の意味に於ける價值論は、近代経済学には存しないと言へる。

Gustav Cassel, Theoretische Nationalökonomie, Einleitung.

(2) マルクス (Karl Marx) の労働價值説は「労働を「價值形成的实体」とするが、之は経済学の中に形而上学を挿入したもの

である。経済哲学には、認識論と形而上学との二つの部門があるから、経済価値に関する形而上学的研究がなければならぬ。併し本論では、価値は経済学の先天的概念として、認識論的に考察されている。

Karl Marx Das Kapital, I. Bd. 5. 18

(3) 経済学は歴史的、社会的科学の一つであるから、経済学に関する範疇論は、歴史及び社会科学一般に関する範疇論を前提している。それについては別個の研究が要求されるが、私は本論では、経済学に特有な範疇論について論及した。

三

経済学に於ける従來の價值論の問題は、結局價值は主観的であるか、或は客観的であるかという問題に帰着する。この場合主観と客観とは、最初から相對立して存在するものと認められ、そしてこの主客の關係に於て、價值は主観の意識内容であるか、或は客観に内屬する性質であるかという事が問はれるのである。併し主観と客観との対立は、通常考えられている様に、直接、自明的な区別ではない。我々の直接經驗は、むしろ主観と客観とが不可分な一体をなし、種々の印象や表象が意識を充している所の、無差別な状態から始る。そしてこの主客未分の状態から、同一の作用によつて、主観が意識されると同時に、主観に対して客観が認められるに至るのである。即ち我々が自己自身を自我として意識する過程と、この自我の外に独立の対象が成立するに至る過程とは、相携えて進むのである。知識の世界を成立せしめるかゝる過程は、実践的領域に於ても見出される。こゝでも主観と客観との区別は、最初から與えられているのではない。我々が單に何等かの対象を享受するに止る限り、そこには唯自足統一的な行爲があるだけであつて、自我の意識も客観の意識も存しない。この主客未分の統一が分裂して、欲求する主体と、欲求される客体

とが、相互に區別されるに至るのである。この場合客観が成立する事と、それが主観によつて欲求される事とは双關的であつて、両者は享樂の直接的統一を分裂せしめる同一の分化過程の、相異なる二面に外ならないのである。然らば主観と客観との分裂は如何にし生ずるか。

客観的實在に關する我々の意識は、我々が事物について經驗する抵抗から生れるといはれる。即ち我々の意志活動が、事物から何等かの抵抗、妨害を受ける時、我々は事物が客観的に實在すると認めるのである。この事はそのまゝ經濟生活に移す事が出来る。我々は事物を無條件に使用、享樂し得ない時に、即ち事物が我々の使用、享樂に対して何等かの抵抗を起す時に、始めてかゝる事物を欲求する。そして欲求の内容は、未だ享樂しないという距りに於て、欲求の対象となる。かくして成立する客体は、主観からの距離によつて特徴づけられるが、かかる客体を我々は價值と呼ぶのである。欲求と充足とが直接結合する所には價值は存しない。この結合が阻止され、欲求の充足に対して距離、障碍、困難の現われる所に、主観的には欲求が、客観的には價值が、同時に成立するのである。價值は欲求の双關係者であり、欲求の対象として、主観の評價作用に於て成立する。その限り價值は主観的であるといえる。併し價值はこの評價作用に於て、障碍、困難、稀少性等の客観的規定によつて、主観より距離を保ち、獨立の対象として、主観に對立するのである。故に價值は主観的であるか、客観的であるかという問は、最初から問題の立て方を誤つてゐる。衝動及び享樂の主観的内容は、價值に於て客観化される。この過程を見落す所に、價值は主観的であるか客観的であるかという問題が提出されるのである。(2)

價值は主観からの距離に於て、欲求の対象として見出されるが、距離、或は障碍の意味は、それが克服される所に

存する。欲求の対象として見出された価値は、それが主観との距りに於てある限り、單に価値の可能性であつて、現実の価値ではない。価値を実現するには、この距離を克服し、障碍や困難を排除して、欲求する対象を現実に獲得せねばならない。欲求の対象に附隨する距離或は障碍を克服して、価値を実現する過程が経済である。可能性としての価値は、経済によつて現実の価値となる。経済価値は、経済によつて実現せられた価値、即ち経済によつて主観との距離を克服されて、経済の対象となつた価値である。⁽³⁾かゝる経済の形式として、第一にあげられるのは生産である。生産は経済価値を実現する形式である。然るに生産に於て、距離或は障碍を克服して、欲求する対象を獲得する爲には、その代償として、他の何物かを提供せねばならない。即ちある財を生産するには、労働或は他の財を、費用として提供せねばならない。ところがこの過程に於て、生産者は生産物と生産手段とを、利得と犠牲として相互に計量し、一物の価値を他の価値によつて測定する。而して対象と対象とが、かくの如く相互に他の価値を規定する事から、価値は対象に属する客観的關係となる。ここに対象の主観からの離脱が達成せられ、経済価値の客観性が実現せられるのである。生産に於て犠牲として提供せられる費用は、生産の目的を達する爲に必要な手段である。この手段と目的とが、その対象性に於て相互に秤量せられるにより、価値が客観化されるのである。生産に於て価値の客観性が実現せられるが、生産は価値を客観化するばかりでなく、価値を産出するものである。我々は生産に於て、物を新しく創造するのではなく、たゞ與えられた物の性質や形状を変更して、實在系列にあるものを、出来る限り価値系列に移すに過ぎない。この場合、手段或は費用として提供された物の価値よりも、目的として生産される物の価値の方が、より大でなければならぬ。即ち生産によつて、我々は価値を増加するのである。この増加せられた価値を余剰価値と

呼ぶならば、生産は余剰價値の生産である。故に生産は物の創造ではなくて、價値の創造であり、價値の増殖、即ち余剰價値の生産である。かくて經濟價値は、生産によつて産出され、超主観的な客観的關係として形成されるのである。

生産に於て財を獲得する爲には、労働又は他の財を提供せねばならない。之は個人と自然との間に行はれる犠牲と利得との交換に外ならない。自然から物を獲ようとするものは、それに相当する代價を支拂はねばならない。この意味に於て、アダム・スミスは「労働は物に支拂われる最初の代價である」と言つてゐる。⁽⁴⁾併し本來の意味に於ける交換は、個人と自然との間の交換ではなくて、個人相互の間の交換である。こゝに於て交換が、經濟の第二の形式としてあげられる。それでは交換は、如何にして價値を実現するか。交換に於ては、個人が対象を獲得する爲に提供する犠牲が、同時に他の個人の欲求の対象なつてゐる。そして前者は、後者の欲求する財又は労働を提供する事によつて、後者の所有に係り、而も自己の欲求する財を獲得する。即ち当事者の一方に於て交換の手段であるものが、他方にとつてはその目的であり、反対に一方の目的が、他方の手段となつてゐるのである。然るに交換に於て、經濟主体は、他に與えるものと他から受取るもの、即ち手段と目的とを比較、計量するが、この價値計量の意義は、生産に於て、生産者が生産物と生産手段とを計量するのと全然同一である。たゞ生産に於ては、個人が自然と交渉するに反し、交換に於ては、他の個人が相手方に立つのみである。經濟主体にとつて、彼の有する物又は労働を、土地に投下するか、或は他の個人に與えるかは、第二次的であつて、何れの場合に於ても、提供によつて空虚となつた場所が、より大なる價値をもつ対象によつて充められるのである。故に交換は、生産と同様に生産的であり、價値形成的である。

生産に於ても交換に於ても、自己の提供する財を代償として、他の財を獲得する事、及び終局の状態が、最初の状態に比して、價値の余剰を生ぜしめる事が主眼である。

交換は生産と同様價値形成の形式であるが、價値の客観化の過程は、交換に於て一層進められる。即ち交換に於て價値の相互規定は、人間相互の關係を通ずる事によつて、超個人的な社会的關係にまで成長し、個人の主観的評價より独立する客観的秩序を構成する。交換は社会的形式であり、交換に於て價値は社会化され、社会的價値となる。こゝに使用價値の交換價値への轉化がなされるのである。かくの如く價値は交換によつて社会化されるが、生産も交換と結合する事によつて社会化され、社会的生産となる。今日の經濟は、交換を基本的形式とするから、交換經濟と呼ばれる。こゝでは一切の經濟行爲が、交換に於て、或は交換の爲に行われる。従つて生産も交換の爲の生産、即ち商品生産となる。生産者は自己の欲求する物よりも、むしろ他の個人の欲求する物を生産する。而してその生産物は、商品として交換の対象となるのである。然るに生産が、かく交換と結合して、社会的生産、商品生産となるのは、生産が本来交換であり、犠牲と利得との交換に於て成立するものであるからである。

生産及び交換は、價値を実現する經濟の形式である。この形式によつて、價値は客観化され、經濟價値として形成される。生産及び交換は、距離を克服して價値を実現する形式であるが、それによつて却つて対象の主観からの離脱が達成せられ、價値は超主観的な客観的秩序となるのである。カントは、対象が認識されるには、直観によつて與えられた対象が、悟性によつて思惟されねばならないと言つたが、⁽⁵⁾ 欲求の対象として見出された價値が、經濟價値として形成されるには、それが生産及び交換によつて、対象の相互規定に持來されねばならない。生産及び交換に於て、

ある対象に対して他の対象が提供されるにより、両者は利得と犠牲として相互に秤量され、一定の価値比率が立てられる。この価値比率は、客観的に測定されたもの、法則的なものとして、個人的主観に対立する。即ち経済のあらゆる対象が、他の対象の中にその価値を表現する所の秤量の相互性によつて、経済価値は客観化され、それ自らの法則をもつ客観的秩序に形成される。通常対象が相互に比較され、交換されるには、夫々の対象が一定の価値を持つて居らねばならないと考えられる。併し二つの線は、夫々長さを持つてゐるから比較されるのでなくて、却つて相互に比較されるによつて、初めて一定の長さを持つのである。同様に一定の価値を持つた物と物とが交換されるのではなく、却つて物と物とが相互に利得と犠牲との關係に立つ事が、各々の物をして価値あらしめるのである。故に価値は、対象がそれ自身もつ性質ではなく、経済が対象に於て形成するものである。この価値形成の過程が、生産及び交換であり、その一般的形式が、相互提供の交換性である。

経済学が一個独立の科学であるのは、その対象である経済生活が、それ自身の秩序をもつ独立の世界として把握されるからである。ところが経済の領域を、独立の世界として成立せしめるのは、経済価値の客観性である。経済は合理的な生活の秩序であるが、経済の合理的秩序は、価値の客観的秩序によつて可能となる。価値の形成と客観化とは、経済、即ち生産及び交換によつてなされるが、対象の相互秤量による価値形式を規準としなければ、我々の経済は一步も前進する事が出来ない。欲望や享樂は、それ自身では価値も経済をも形成しない。二個の主体間に於ける、又は同一の主体に於ける交換によつて、始めて価値と経済とは同時に可能となる。交換、即ち経済を通じて、之と同時に経済の価値が成立する。「経験の可能性の制約は、同時に経験の対象の可能性の制約である」とカントは言つたが、

同じ意味に於て、「経済の可能性の制約は、同時に経済の対象の可能性の制約である」と言う事が出来る。(6) 二個の対象を、経済と呼ばれる關係に持來す所の相互提供の關係が、同時にその対象を價値の範疇に引上げる。即ち價値の經濟性が成立する同一の相互性の中に、經濟の價値が生み出されるのである。

價値が經濟的相互性、即ち相互提供の關係に於て成立する事から、價値と價格とは同一であるという帰結が導かれる。ある物が經濟的に何等かの價値を持つと言う事は、それが何物かを値する事、即ちその物に対して、何物かゞ支拂われるという事を意味する。ところが價格とは、ある物を獲得する爲に支拂われる代價に外ならない。そしてこの代價、即ち犠牲の提供が、價値を成立せしめる不可欠の條件である。故に價値は、その概念的本質に於て、價格に一致するばかりでなく、價格がなければ價値は生れないといえる。然るに經濟学に於て概念上、價格が價値より區別せられる所以は、價格が一定の貨幣量で表現された價値である所に存する。價格はある物に対して、代價として支拂われる貨幣額である。價格に於て物の價値は、一定の貨幣量を以つて表現されるのである。而してこの事は、今日の交換經濟が、所謂貨幣經濟であり、貨幣が常に交換の一方に立つてゐる事に関連してゐる。然らば貨幣とは如何なるものであるか。それは經濟に於て如何なる意味をもつものであるか。

價値は事物の相互提供の關係に於て成立するが、かゝる經濟價値の本質を、最も純粹な形式に於て表現するのが貨幣である。即ち貨幣は、經濟的相互性を表明し、經濟によつて形成され客観化される價値を、純粹な数量的關係に於て、客観的に表現するのである。然るに貨幣は、それ自身一個の歴史的概念であつて、經濟生活の歴史的發展の中に漸次にその姿を現わし來つたものである。一切の対象は、それが他の対象と交換し得られる限り、即ち他の対象を獲

得する爲の手段として用いられる限り、ある意味に於て貨幣である。かゝる手段としての意味が、一定の対象に於て特に顯著となるに従つて、その対象の個有の價值と結合しつゝ、貨幣の機能が現われる。貨幣の機能は、最初素材の対象價值に支持せられて成立するが、その機能が發達するにつれて、次第に対象價值より解放される。而して貨幣の機能價值が遂にその対象價值を征服して純粹な象徴的意味を取得するに至つて、貨幣は經濟價值の純粹な表現となるのである。こゝに於て貨幣の機能として、第一に一般的交換手段である事が、そして第二に價值の客觀的表現である事があげられる。併しこの二つの機能は、貨幣に於て別々にはたらくのではない。貨幣が交換手段として、純粹な象徴的意味を持つのは、それが價值を數量的關係に於て、客觀的に表現するからであると同時に、他方貨幣が價值の客觀的表現であるのは、貨幣が純粹に交換手段として用いられるからである。故に一般的交換手段と價值の客觀的表現とは、同一機能の相異なる二面に外ならない。この二つの機能を、それ自身の中に統一する事によつて、貨幣は價值及び經濟に対して、重要な意義をもつのである。即ち貨幣が交換を媒介する一般的手段となるによつて、相互提供による經濟の價值形成の過程が無限に進展すると共に、貨幣が價值を數量的に表現するによつて、經濟價值の客觀化の過程が完成せられるのである。かくて交換經濟は、貨幣經濟として發展し、一切の經濟價值は、貨幣によつて客觀的數量的に表現せられ、價格として形成せられるのである。(7)

以上に於て私は、價值論の認識論的考察より出發し、經濟價值の論理的意義を確定すると共に、價值形成の形式として、生産、交換、經濟、價格、貨幣等の諸概念を展開した。經濟生活は價值生活であり、價值と經濟とは相互概念である。價值は經濟によつて形成され、客觀化されると同時に、經濟は價值の客觀性に基いて、合理的な生活の秩序

に組織される。欲求の対象として見出された価値は、生産及び交換によつて客観化される。この客観化の過程に於て、価値の経済性と同時に、経済の価値性が成立する。価値が経済的相互性に於て成立するにより、価値は価格と一致するが、価値をして價格たらしめる貨幣は、経済価値を純粹な概念性に於て表現するものである。貨幣によつて、価値の客観化は完成され、価値は数量的表現を得て、價格として展開される。之等の諸概念は、経済学の根本概念であり、経済学的認識の先天的概念、即ち範疇である。かゝる範疇を、論理的アプリアリとして前提するによつてのみ、経済学の概念構成は可能となり、経済生活は、経済学の対象として確立されるのである。貨幣が価値形成の最後の段階であり、経済価値の純粹形式である事から、貨幣を以つて経済学の中心概念となし、経済学的認識の唯一の論理的アプリアリであるとする所に、貨幣中心説が生れる。併し貨幣は、経済学の唯一の範疇ではない。貨幣と価値とは双関概念であり、価値を内在的契機とする事なくしては、貨幣概念は可能とならない。この関係は、他の範疇についても同様であつて、経済学の諸範疇は、相互に他に依存しつゝ、経済学の論理的アプリアリとなる。対象の相互規定が、価値及び経済を成立せしめると同様に、経済学の諸範疇は、相互に関連、依属する事によつてのみ、経済学的認識を可能ならしめるのである。こゝに於て経済学範疇論は、範疇の体系を求め、経済学の諸範疇は、その相互関係に於て、体系的に組織せられるのである。

経済学の諸範疇は、経済学の依つて立つ論理的根拠であるから、経済学自身によつて基礎づける事は出来ない。経済学は範疇論の問題を、経済哲学に任さねばならない。然るに範疇は、それによつて可能となる經驗的認識によつて、内容的に制約せられているから、経済学的範疇は、経済学を離れて超越的に構成する事は出来ない。哲学は科学の事

実を前提するのみならず、科学によつて内容的に制約せられている。この関係は範疇論に於て最も緊密である。範疇論は、哲学と科学との限界領域であり、こゝでは超越的當爲と経済的存在とが、内在的意味によつて結合せられている。経済学の範疇は、経済的認識の内在的アプリアリであり、経済学を超越すると同時に之に内在している。経済学の方法及び認識目的は、ある程度まで、認識論及び方法論一般から、先驗論理学的に演繹せられるが、経済学の範疇は、どこまでも経済学的認識の事実に即して、先驗心理学的に構成せられねばならない。こゝに経済学範疇論の特殊の意義と困難とが存するのである。経済学範疇論は、経済学認識論にとつて、最後のそして最も困難な問題である。本論に於て私の述べた所は、單にこの問題の所在と、解決の方向とを示しただけであつて、その完成は今後の研究に俟たねばならぬ。(8)

註(1) テイルタイ (Wilhelm Dilthey) は、外界の实在性に対す我々の信念を、衝動或は意志が抵抗、妨害を受ける事実から説明してゐる。

Wilhelm Dilthey, Beiträge Zur Lösung der Frage von der Ursprung unsern Glaubens an die Realität der Aussenwelt und seinen Realität

(2) 價值概念の理解に關して、私はジメル (Georg Simmel) の思想から、多くの点を學んだ。ジメルは價值及び貨幣の本質を、人間生活の根本形式である相互作用から理解すると共に、経済的相互性の純粹表現としての貨幣の機能から、人間生活の本質を把握せんとした。従つて彼の「貨幣の哲学」は、貨幣の形而上学、経済の形而上学である。私はジメルの價值論から、その論理的、認識論的意義を取出す事に努めた。

Georg Simmel, Philosophie des Geldes. 5. 1—61

(3) 主観から距離に於て欲求の対象として見出された價值が、價值の可能性に過ぎない事は、水中の魚や、空飛ぶ鳥が、現実の經濟價值でないという事によつても明かである。之等の対象が現実の經濟價值となるには、距離や障害が克服されねばならない。欲望と稀少性とだけでは價值は生れない。價值は經濟によつて始めて形成されるものである。

(4) アダム・スミス (Adam Smith) はここで労働を價值實現の手段として説いているが、併し彼にとつて、労働は富、即ち價值の源泉である。ここからマルクスはその労働價值説を發展したのである。

(5) Kant, *Ibid.* P. 74—76

(6) Kant, *Ibid.* P. 197

Simmel, *Ibid.* S. 45

(7) 貨幣が價值の客観的表現であるという事は、それ自身主観的な價值が、貨幣によつて始めて客観化されるという意味ではない。價值は經濟によつて既に客観的關係に形成されているのであつて、貨幣はその數量的表現を以つて、この客観化の過程を完成するに過ぎない。この事は、一切の対象は、それが他の対象と交換せられる限り、貨幣の意味をもつていふ言う事に対応する。心理上最終のものが論理上最初のものであるといわれるが、我々は價值の論理を生成的に把握せねばならない。

(8) 經濟には、價值の創造と價值の形成という二つの方面がある。経済学範疇論は、経済学を可能ならしめる先天的條件を究明するものであるから、生産や交換に於て、價值の形成、價值の客観化の形式を求める。之に反して經濟の形而上学に於ては、價值の生産性、創造性が問題である。價值及び經濟が、客観性と創造性との二つの意味をもつにより、經濟学範疇論は、認識論と形而上学との結合点となる。併し之等の問題に立入るのは、別の機会に譲らねばならない。